

条里制と現代都市～大阪市平野区を対象とした現代における影響と変遷～

建築デザイン研究室 A98T431 登尾 聡

1. 研究の意義と目的

これまで行われてきた都市研究は、歴史領域と現代都市計画領域は、全く別個に扱われてきた。

しかし、歴史的物事も、ここに存在するかぎり、現在の要素のひとつである。

この研究では現在の都市空間を歴史的連鎖の上に位置づけ、さらに過去を現在として捉えることにより、異なる時空を等価に検討する都市・歴史分析をとく手に地域を対象とし行っていく。

大阪の都市基盤には古代の条里制が大きく関わっている。平野区南部地域には戦後間もない頃まで条里制を継承していると考えられる地割の農地が広範囲に残っていた。その代表的地域といえる平野区周辺を対象に本研究では、条里地割を切り口にこの地域の変遷を明確にすることを目的とする

2. 調査

本接では、条里制分析のために条里地割を直接残したまま市街化の進んだ地区と土地区画整理・耕地整理後市街化の進んだ地区それぞれに及ぼした影響を分析するために各地区における地割が大きく変化する契機を調査することを目的とする。

図1. 平野区南部における地割の変遷

3. 分析

大阪市平野区南部において戦後の急速な市街化の進む以前に条里地割の残っていたものについて航空写真などを用いて復元する。ここでは、主に近代の市街地変遷における条里地割の継承過程を分析することを目的とする。

古代に敷かれたと考えられる条里地割の中で近代にまで継承され続けているものに線を引く。

条里地割を復元し、それを現代地図に重ね合わせた結果、道幅を広げて若干のズレはあるものの土地区画整理地区を除いてそのほとんどが現代にまでけいしょうされていることがわかった。(図2, 3参照)

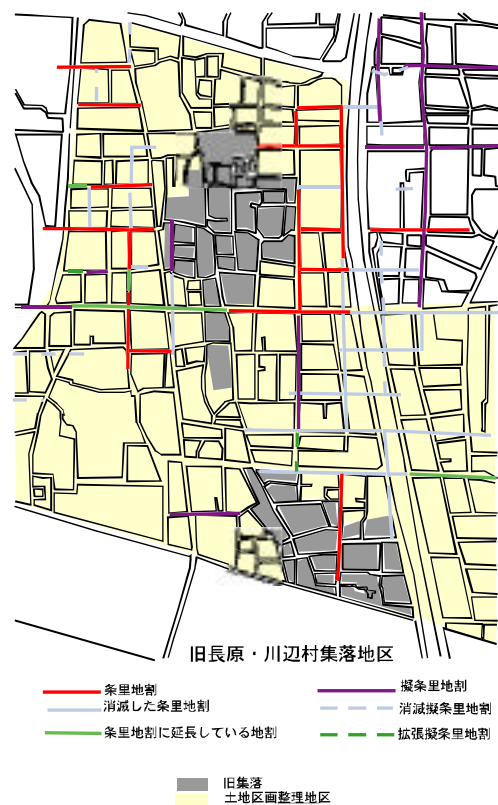


図2. 旧長原村集落

4. 考察

これまでの分析の結果から、条里地割の残っている地区で市街化が進むと条里地割に沿ってそれが起こることがわかった。その中で近代における条里知和の残存形態の特殊な地区として旧長原村集落に注目している。この集落は南北に長く形成され、集落の中には条里地割が全く残らず、故意に道を曲げているかのように見える。その周囲は集落を東西に飛び越えて、条里地割が連続して残っていた。

また、この地区には遺跡が多数発掘され、条里地割が施工された時期は散村であり、後に集村化が始まった

ことを指摘している。しかし、その時期・規模の主催はわかっていない。¹
 いずれにしても、長原村集落は条里地割が敷かれた後、集落が形成されたことは明らかである。この集落と農地とのある種の対立は、近世に描かれた絵図から長原村集落がこの位置にあることを記していることにより、少なくとも近世から続くものと考えられる。また、同じ平野区内の旧瓜破西村集落は近世に成立した集落である。この集落は集落外部の周囲の条里地割と連続するように形成されている。このことから、近世と近代におけるこの地域における市街化は条里地割に沿うことがわかった。一般に近畿地方の村落の集村化は早い地域で中世に始まることが指摘されている。長原村集落においても同様に考えると中世における集村化は条里地割に沿わないことがわかる。この原因としてはまだ詳しい理由はわかっていないが、集村化と同時に勘合を形成する事例が多数確認されている。長原村集落も同様に考えると、環濠は存在しないものこれは外敵からの集落を保護するための集落の外部に対す

図3．条里地割復元図

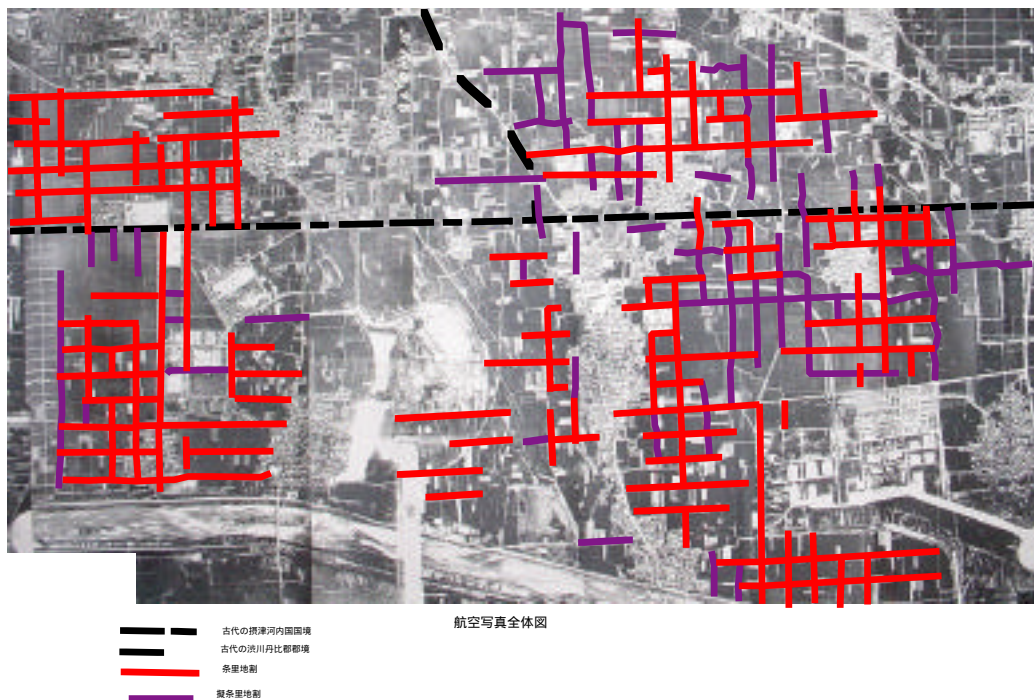
る閉鎖的なコミュニティーの表れとして読み取れ、それが現代にまで残っていることと考えられる。その後、この地区における土地区画整理の際には集落を除く周囲のみが計画されて、中世以降の集落内部と外部の農地との対立は脱しきれていないことが条里地割を分析してわかった。

5．結論

約 1200 年前に施工された条里地割は現代都市にまで多数残っていて、未だ不明な点は多数あるものの、それは過去を読み取る上での重要な要素にもなり、同時に現代都市を読み取ることとなる。これまであまり詳細にまで分析されることが無かった条里地割は現代都市に潜む要素を読み取る新しい視点になることは間違いない。

6．謝辞

一年間続けて指導して頂いた中谷先生、大阪市立大学文学部教授の栄原先生には条里地割復元に御協力していただいたことに感謝します。



¹ 『新修大阪市史第二巻』

